

身近な性暴力—若者の人権意識をどう育むか

◇対談者

福田 弘 聖徳大学教授・筑波大学名誉教授
藤原志帆子 ポラリスプロジェクト日本事務所 代表
 ※コーディネーター **大野 曜** 日本女性学習財団理事長

大野: 8月に国連女子差別撤廃委員会 (CEDAW) から日本の人権問題への取組の遅れが指摘されました。本日は、人権教育研究者の福田弘さんと人身売買撲滅をめざす活動家の藤原志帆子さんに、喫緊の課題である性暴力問題、特に若者の人権意識をどう育むかについて、語りあっていただきます。

ペスタロッチとの出会いが人権教育研究の道へ

福田: 学生時代に一冊の本を通してペスタロッチと出会いました。スイスの教育家・思想家で、今から200年以上も前に、人間扱いもされない最下層の民衆やその子どもたちの教育による人間的解放に取り組んだ人物です。彼はまた、嬰兒殺しの頻発という当時の社会問題の本質に迫り、刑法及び民衆教育の改革を通して女性の人間的解放をも追求したのでした。子どもや女性の人権の実現に真摯に取り組んだペスタロッチとの出会いが、私の人権教育研究の原点にあります。

最初の勤務先 (現国立教育政策研究所) でのヨーロッパ評議会^(注) 研究部長との出会いから人権教育の国際的動向と課題の探究が始まり、25年ほど後に、国際的に著名な文献の邦訳書 (『人権教育のためのコンパス [羅針盤]』等々) に結実しました。

次の任地奈良教育大学で人権教育の第一人者である中川喜代子教授と出会えたのも幸いでした。これが、日本社会に現存するさまざまな差別や人

権問題の具体的解決に資する、人権教育を土台とした道徳教育研究開始の原点になったからです。

筑波大学へ転勤して以来、「人権意識を高める道徳教育」と「人権・平和教育論」を中心に研究と教育に取り組んでいます。

留学先での被害者支援の体験から人身売買撲滅活動へ

藤原: 高校3年のときアメリカに留学し、夏休みに帰国するたびに、性産業の盛況と女子高生の性を買う「援助交際」が蔓延している日本に驚きました。留学した大学では指導教授に恵まれ、NGO活動への参加など参加型授業をたくさん経験しました。そうした中で、ワシントンD.C.にある「ポラリス」という人身取引被害者を支援する団体の活動に参加しました。性風俗・売春目的で連れてこられるアジア人女性や中南米からの移民は強制就労や虐待を受けやすいのです。そのとき出会った被害当事者の少女たちの生きざまに強い衝撃を受けました。保護された後のわずかな時間を一緒に過ごしたのですが、明るくふるまう彼女たちは数週間前までは、毎日何人もの客と寝なければならなかったのです。私と年齢が同じくらいの女の子が、環境が違うだけでこんなに差が生じるのかと思うと同時に、その気丈さに胸をうたれました。“日本にも人身売買をなくすための活動拠点を”と運営を始めてから5年目になります。

低年齢化する性暴力被害者

藤原: 最近増えてきたのは日本人の女の子の強制売春。家出少女がねらわれやすいようです。若い子の方が需要が高いという現状もあり、東南アジ

アなど海外から女性を連れてくるより、国内の少女を騙して働かせる方が割がいいのです。ポラリスでは、渋谷周辺にいる、そういう少女たちに声かけする活動もしています。今朝も家出して4ヵ月という10代前半の少女に出会いました。これから児童支援施設に紹介する予定です。

被害者の多くは、幼いときからいじめや親からのネグレクトなど、人権侵害を受けていたりします。自分の身体を切り売りするようになる子は、人に騙されたり裏切られたりを繰り返し、何らかのトラウマを抱えていることが多いのです。ポラリスに来る相談者も最近では男女に関係なく10代が多くなりました。日本では、人は平等と言うけれど、子どもは大人の半分くらいしか人権が認められていないと感じます。若者を巻き込みながら勉強会をしたり、携帯サイトやネット上での人権侵害に遭わないように高校や大学で講演していますが、基本的には毎日の生活や教育の中で情報発信していくべきだと思います。

人権とは具体的権利の集合体

福田:今日の社会で一番の問題は、人権とは何かという基本的理解が年齢層を問わず不十分であることだと思っています。人権の本質や意義をわからなければ、自分のもとより、他者の人権も守れません。自分のナマの欲求や願望を人権だと誤解して、他者の人権を踏みにじる恐れもあります。

人権とは、すべての人が人間の価値と尊厳にふさわしい生き方をするのに不可欠な諸権利です。human rights のsでわかるように複数形です。具体的で数えられるいくつもの基本的な権利や自由の全体が人権なのですよね。そして、人権の土台

には、誰であれ、人は人間としての価値と尊厳をもっている、という事実があります。だから、人はすべて自由であり平等です。そして、国家であれ個人や団体であれ、人間をモノ扱い、道具扱いしては絶対にいけない。お話にあった被害者の少女たちも、自分が価値や尊厳をもつ一人のかけがえのない人間である、と知ってほしいですね。

藤原:実は自分の尊厳に気づかせてくれる人が彼女たちの周囲にいないのです。自分がスペシャルな存在だと気づいてもらうには、ポラリスはまだまだ未熟です。やはり伝え方のトレーニングをしなければと思っています。『コンパス』(前掲)には本当にたくさんの事例が出ていて、具体的な権利を守ることが人権だとわかります。実際に教材を生かせるファシリテーターを育てることも大事ですね。

福田:そのとおりです。教育は頭に働きかけるだけではだめで、頭(知性)と心臓(道徳性)と身体(手・スキル)のどれも軽視できません。こうした考え方に立つと、「参加的」「協力的」「経験的」な人権学習が必然的に要求されます。『コンパス』はまさにこの基本原理に立っています。

今、「人権感覚を育てるのが第一だ」と声高に叫ばれていますが、少し危ないと思っています。「知的理解はともかく、感性や人権感覚が十分に育っていない」という言い方は、知識と感覚・感性を切り離れた見方です。人身売買の問題についてもきちんと理解していない人がまだ非常に多いわけで、知的理解が十分だとは思いません。

また、単に参加的に体験すればいいというのではなく、理論と実践を結びつけることで指導者がどうかかわっていくかをきちんと押さえたファシリテーターが増えてほしいと思います。

福田 弘 (ふくだ ひろし)

聖徳大学教授・筑波大学名誉教授。
専門は道徳教育論、人権・平和教育論、教育思想史。教育学博士。



藤原志帆子 (ふじわら しほこ)

ポラリスプロジェクト日本代表。
草の根で暴力被害者の支援や若い女性や子どもの人身売買問題に取り組む。

若者とのコミュニケーションは携帯サイトなどで

藤原: 私は性教育を通して自分の身体の尊厳を知ってもらうことが大切だと思っています。

最近ではコミュニケーションが希薄で、彼氏や援助交際相手を見つけるのもネットです。見えない相手に自分の切実な相談をするほど孤立していて、自分が侵されている権利を友達にも先生にも話せないでネット上の知らない人に話すという逆転した状況があります。そういう現実の中では、彼女たちが使う言葉でQ&Aをつくってネットに流すのが効果的だと思い、女の子向けの携帯サイトもつくっています。

また、これからは気軽に立ち寄れる「ドロップイン」を土曜の夜に開き、集まった10代・20代の女の子たちと、気軽に性について語りあう場を企画しています。最初のテーマは「みんなの性教育: 避妊? ビオーキ予防? 知っておきたいコンドームのこと」。女の子の中には早い時期に性暴力の被害に遭って、性に関してネガティブだったり、セックスを愛情のコミュニケーションではなく何かの取引ととらえていたり、間違った性知識で傷つきやすい状況に置かれています。だから「自分の身体、大切にしていんだよ」というメッセージを参加型で届けることを大事にしています。セミナーも、最近では学生に混じって高校や養護施設の先生たちがやってくるようになりました。性暴力が取り沙汰されたときだけ対症的に取り組みのではなく、幼いときから人権意識を育てるような機会を充実させたいのにと感じます。

福田: 藤原さんの活動は、研究者の私には到底かわられない、素晴らしい活動ですね。またネット

を介しての活動も有効だと思います。「自分の身体を自分で守っていいんだよ」と伝えることで、「あなたは人間としての価値と尊厳をもつ、かけがえのない一人の人間であり、あなた自身に価値がある」ことにも気づいてもらえるといいですね。ぎりぎりのところで被害者を救い出す活動は、「人間の尊厳」を重んじる勇氣ある尊い仕事です。

若者を加害者としないうために

藤原: 未成年の子が犯した行為の責任はほとんど社会にあると思っています。中学生の男子が同年代の女子を買うという事件が起こるのは、街やコンビニ、ネットに性の商品化情報があふれ、アダルトビデオなどをいつでも見られるように大人が垂れ流しにしてきた結果です。子どもたちが毎日シャワーのように情報を浴びていても放置されています。韓国では、買春は女性への暴力として買う側を処罰しますし、性教育で「女性の身体はモノではない。買春は人の心を買うこと」と教えます。

福田: 1つには法的整備が必要ですね。女性を軽んじる社会は男性もいらい加減に扱われます。憲法の基本的人権の尊重を立法化していく必要があります。もう1つは尊厳の問題で、人権意識を高める教育が必要です。あふれる情報の中で洗脳される若者の問題は根本的には教育問題ですが、現在の教育は知識の切り売りとなっていることが問題です。

性暴力の加害者は、確かに誤った性情報の洪水の中にいる犠牲者という一面もありますが、加害者になるということは明らかに罪です。中高生でも女性を道具として見るということ自体が間違いですから、処罰は厳正であるべきだと思いますね。



『子どもを対象とする人権教育マニュアル コンパシオ [羅針盤]』▶
ヨーロッパ評議会 企画 福田弘 訳 (2009.8)
(財)人権教育啓発推進センター発行 2,625 円

他者の人権への共感を育む大人の力

藤原:最近、自分の子どもの裸の写真を撮って売る親や、「アイドル」と称してごく小さな水着をつけて卑猥な行為をさせた映像(DVD)を売る会社が少なくありません。そういう現実をPTAなどで話すと「うちの学校にこういう子がいなくてよかった」「うちの子がこういう子でなくてよかった」という反応が返ってくるのです。妹や妻には風俗嬢になってほしくない男性が、自分は風俗に行き風俗嬢を蔑んでいるということによくあります。自分の大切な人の人権は尊重する一方で、自分から離れていればいるほど侵害してもいいと思っている、ある種の無関心さはすごく怖いですね。

福田:人の痛みがわかる感受性や、被害者の思いや立場を共感的に理解する力は、教育によって育むことが必要ですし、可能です。人権侵害の被害者が他人であっても、それを許せないことと感じ取り、解決しようとする人権意識・人権感覚を高めることが必要です。藤原さんがなさっている活動のように、真情のこもった声かけを受けた子たちは、きっと自分の価値に目覚めることにつながると信じたいですね。自分の価値や尊厳に明確に気づくのは先のこともかもしれないけれど、温かい言葉かけや接触は、必ずその子の生きる希望につながっていくと信じます。

藤原:ポラリスの活動でも人にかかわるということは時間も労力もすごくかかると実感しています。「自分の生きている間だけ問題がなければいい」と思っている“事なかれ主義”の人が多いことに愕然とします。人権教育が欠落すれば、性を強要する男性が増え、性暴力が跡を絶たないと思

います。性暴力はものすごく大きく深い傷を心に負わせますから、傷を負ってしまった人が自信をもって社会を担う力を発揮できるとは思えません。若者が自信をもって能力を発揮できるように育ててほしい、そのためにはどうしたらいいか、あらゆる人に考えてほしいと思います。

10年先を見て積み重ねていく教育と国際的視野に立った取組が必要

福田:教育の成果はすぐに見えるわけではないけれど、10年先を見て積み重ねていくことが大事ですよね。最近、「コンパス・セミナー」で、人権侵害被害者の立場を経験してもらっていますが、人権の意義を体感できると好評です。ヨーロッパの政府高官を対象に実践したところ、「こんなこと考えたこともなかった」と活発な議論が展開したそうです。『コンパス』に続いて『コンパシオ』を翻訳したのもこんな理由からです。私たちが人権擁護についての国際的な動きに敏感になって、パブリック・コメントなどで政府に要求していくことも必要です。

藤原:人身売買の問題が大きく動いたのは、国連や海外から「日本の基準はおかしい」と指摘されたからです。国際的視野をもち、外圧もしたたかに利用しながら戦略をたて、いろいろな人たちを巻き込んで活動していきたいと思います。

大野:暴力の被害者の大半は女性や子どもです。人権教育と活動現場からの提言が若者に届いてほしいと思います。ありがとうございました。

(注) ヨーロッパ評議会は、ヨーロッパ地域47カ国で構成する国際機関。法の支配、基本的人権と自由を市民に保障することを目的とする。
(収録 於日本女子会館 2009.9.4)